

二十七日、義景總司令長官の采配を執りて、一乘城を出馬す。

虎杖、椿井阪を經て近江の浅井備前守長政と合力し、柳ヶ瀬より匹田口へ向ふ

二十八日、敦賀へ着陣し、直に開戦したが、朝倉勢は所謂地戦にて、國內の地理に精いから、さすがの信長も、一とたまりもなく大敗し、義景の爲に一千三百五十三の首級を擧げられた、是に於て朝倉勢は大捷利を獲て凱旋した。

元龜元年六月十九日、信長は捲土重來の勢を以て、數萬騎に勧員命令を下した、而して義景の旗下に在つた北近江

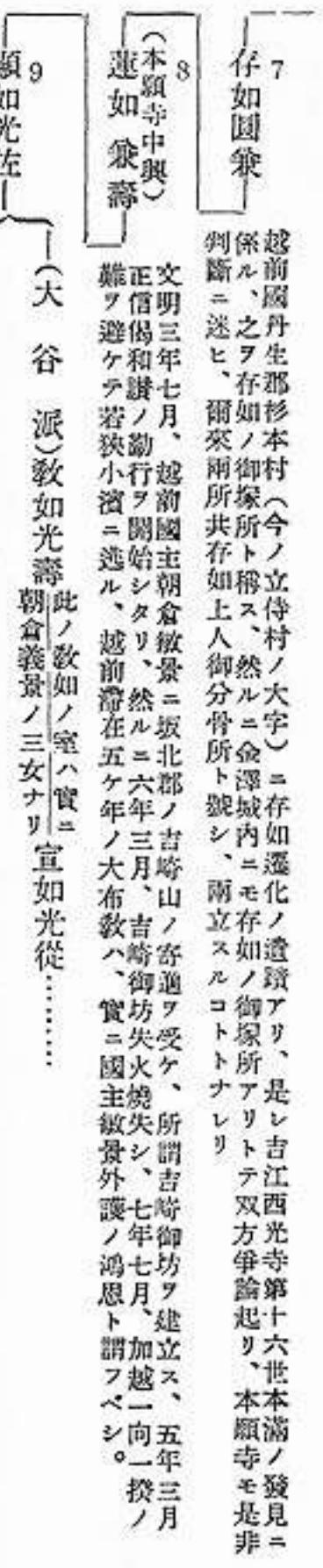
の山本山、横山の兩城を攻立てたので、近江の淺井長政は直に之を義景に急報した、義景激怒し、先づ朝倉孫三郎景健を、一万餘騎の大將として進發せしめた、二十八日、長政は義景の後詰を待ち兼ね、磯野丹波守秀昌を大將として五千餘騎を派遣し、近江の姉川を打越して合戦を開始し、信長の先陣を擊破し、信長麾下の勇士坂井久藏、可兒彦右衛門、坂井喜八郎等一千餘人を捕へたので、信長は又敗軍して岐阜に歸陣の時、朝倉氏の油斷を見すましたる松平三河守、徳川家康の一千五百餘騎は、サツト景健の陣中へ突撃して來た、此の意想外の合戦に於て、朝倉氏一騎當千の豪傑眞柄重郎左衛門等百二十餘騎を失ひ、互角で休戦するに至つた。

一〇、信長本願寺を攻めて敗北す

元龜元年八月二十八日、攝津國福島城將三好笑岸と細川六郎を攻めたが、是れも亦敗績した、信長は義景と敦賀に戦ひて大敗し、姉川合戦にては引分に終り、今又敗北したので、癪癡玉はとう／＼破裂し、近所の大阪にあつた一向宗道場の本願寺顯如に飛火した、「本願寺は中々繁昌する、坊主の分際で威勢を張るのは生意氣だ」といつた調子で「本願寺を攻め落せ」と命令を下した、下女は釣瓶の繩を振る流儀で、江戸の櫓を長崎で擊たれるやうな破目になつた本願寺こそ、大の迷惑と言はねばならぬ、そこで本願寺も賣られた喧嘩なら買はねばならぬ事となり、俄に櫓の岸と河口の兩所へ出城を築いて防戦の準備をした、十三日、信長の軍勢は愈々押寄せて來たが、又々擊破されて、とう／＼信長は面目丸潰になつた、是に於て信長の激怒その極に達し、「諸國の一向坊主を全滅せよ」と下知した、これが信長の一向一揆退治の原因である、顯如は途方に暮れ、思案の結果、その縁者たる朝倉義景に應援を依頼した。

本願寺略系

○親鸞——如信——覺如宗昭——(家督セズ) 徒覺慈俊——善如俊玄——綽如時藝——巧如玄康



右の如く顯如は本願寺の第九世であるが、その嫡子教如と義景の三女とは、當時許嫁の間柄であつたから、義景と本願寺とは密接の姻戚であつた、乃ち義景は顯如の應援の依頼を受くるや、信長は從來宿敵のことでもあり、直に快諾して、自ら兵二萬八千餘騎を率ゐて出陣し、先手として朝倉孫三郎景健、山崎長門守吉象、淺井備前守長政等一萬三千餘騎を近江國に派遣し、滋賀郡宇佐山、堅田兩所に出城を構へ、長臣森三左衛門尉可成、舍弟織田九郎信治を大將として、七千餘騎を以て兩城に籠城せしめた、九月十九日開戦となり、朝倉勢は突撃又突撃、忽の間に兩城を破却し、信長の舍弟信治、可成を始め、七百五十餘人を伐捕り、勝鬨の聲大地を動かした、二十四日、義景の本陣比叡山麓の坂本に着陣す、千野、仰木、雄琴、苗鹿より大溝、新庄にかけて、人馬寄せ、立錐の地もない、時に山門の衆徒六千餘人、大津、打出、勝所、石山、田上邊の百姓等、皆義景の麾下に屬したので、朝倉式部太夫景鏡は、兵三千餘騎を兵船五十餘艘に配置して、膳所に滯陣す、信長は野田、福島、大阪等にて、刻々の注進に依り、いよ／＼一大事に成れりとて、忽ち大阪表を引拂ひて上洛し、近江國滋賀郡に入りて、滋賀山の本陣に到着した、將軍足利義昭は、嘗て信長に救助せ

られた義理で、是れまた京都東山の將軍塚に陣を張つた、所が堅田の住人猪飼甚助等が信長へ内通し、堅田の新城へ大將方の加勢を乞ふたので、信長大に喜び、坂井右近太夫等を大將として、三千餘騎を急派した、十一月二十五日、義景は北庄土佐守景行を大將とし、印牧彌六左衛門尉、三段崎權頭（福井市醫師三崎玉雲の祖先）堀江兵庫助等五千餘騎を大將として堅田城へ遣し、之を攻陥して一千五百八十餘の首級を擧げた、信長は速戦連敗で、遂に住國尾張への通路を遮断されたので、さしもの豪傑信長も悲鳴を擧げ、密かに奏聞して「信長に本國へ歸還すべき」勅諭の御下附を伏願した、是に於て大納言三條實澄、中納言滋井冬隆を兩勅使として御曖昧の勅諭あり、「自今以後、朝倉家に對して弓引く事有る可からず、ゆめ／＼龐意申間敷き旨、起請文を以て佗言すなり、斯の勅諭旁々以て遠變し難し」と、証文の一札を入れた、信長も男前を下げたこと甚しい、乃ち十二月十三日、義景は「勅諭なれば、いとも畏し」と申し、みす／＼勝戦を眼前に控へながら、潔く御受けをして闇を解いた、義景も亦忠誠の名將と謂ふべきである。

一 朝倉氏衰運の前兆

近年義景は常勝將軍として威望天下を壓する勢を示しかけたが、翻つて一族郎黨の内情を顧ると、秋風落葉の感なくんばあらす。

朝倉右兵衛尉景高は嫡子、次男共一年の内に死去し、續いて景高も逝去したので、今は末子の孫三郎一人のみが存命して居る。

朝倉九郎左衛門景紀の嫡子四郎左衛門景墳は加賀出征の時、大將景高と爭論して自害し、舍弟中務大輔景恒、父景紀も引續き死去す。

堀江左衛門三郎利茂（坂井郡岡部直景の祖先）は、永祿十年八月二十日、加賀一揆に左禍せし疑惑を以て、義景よ

り父景忠と共に勘氣を蒙り、能登に退去してしまつた。（後チ景忠利茂父子ハ信長ニ仕へ、利茂ハ加賀國）

堀江氏略系



磯野丹波守秀昌は、近江國佐和山の城主であつたが、元龜二年の春、丹羽五郎左衛門の紹介で、信長に降参す。伊勢左衛門太郎景茂は、大酒の爲に頓死した。

其の他一千騎、二千騎の大將の資格實力ある朝倉玄蕃助景連、朝倉次郎左衛門尉景尙、前波藤右衛門尉景定、小林備中守、塙田九郎右衛門、黒坂備中守

等は、當時既に逝去してしまつて居る、然らば生存して居るものに人物があるかといふに、巧言令色の佞奸朝倉式部大輔景鏡が長老の筆頭で、朝倉氏一切の指揮命令を下すやうになつて來た、而して義景は嫡子阿君丸の頓死以來、合戦には出陣して居るけれど、これは一種の憂晴し氣分で出馬したので、内心は家政も國政も料理する氣概を缺いて居る、又後宮三千の寵を一身に集めた觀のある北方小少將は、公私共評定に關與するやうになつたから、此の間讒間大に行はれ、賞罰當らず、朝倉氏衰運の兆は、益々濃厚になつて來た。

二 義景家臣の離反と虎御前山對陣中の失策

元龜三年七月中旬織田上總介信長は、近江國北郡の淺井長政の城前に在る虎御前山へ、城廓を築造した、元龜元年十二月、信長は畏くも勅使の下向を乞ひて、「自今以後、朝倉家に對して弓引く事有る可からず」と、一札を入れたに拘はらず、又朝倉氏に挑戦の魂膽である、長政は大に之を憤り、使を馳せて義景に訴出たので、義景もその不信を怒り、直に朝倉式部大輔景鏡の先陣五千餘騎を長政の小谷城に派遣し、二十四日、義景は一乘城を進發した、朝倉孫三郎景健、同三郎景胤、同權頭道景等、同勢三萬二千餘騎と號す、一旦敦賀に着陣したが、二十八日、近江國柳ヶ瀬に陣を布いた、此の日暴風あり、八月三日、義景、淺井城の大手なる大嶽城に居る、信長勢五萬餘騎の先陣は、既に虎御前山に到着したが、後陣は美濃國垂井の赤坂に支へて居た、信長は一日遅れて來たが、旌旗天を蔽ひ、槍尖地に鋒き、その行狀は人をして驚心駭目せしめた、九月十日、義景も信長も共に虎御前の麓に陣したが、合戦なし、翌日豫ねて義景より勘氣を蒙つて居つた前波丸郎兵衛吉繼父子は、馬を連ねて朝倉勢を出で、敵城目掛けて驅出したので此の際忠功を抽で、勘氣御免を乞ふものと思ひきや、左は無くて、信長に降参の目的であつたのである、信長歡喜斜ならず「恩賞は他日越前國を宛行ふべし」と豫約した、此の時既に信長は勝戦の自信があつたので、越前國守護代を吉繼に賞賜せむものと覺悟したのである、（別項桂田長俊參照）又四五日を経て、富田彌六郎長繁（朝倉始末記等に孫六長秀とあるは皆誤記なり）も、その家來毛尾猪之助、増井甚内の兩人を伴ひ、信長の部下となつた、此の功に依り、長繁は、嘗て信長の本陣であつた越前國府中の龍門寺城主に任せられた、斯かる朝倉氏の一大事に當り、時も時、兩將を一時に失つたことは、義景に取りて一大打撃であつたことは勿論である。

十月月中旬、朝倉出雲守景盛の被官竹内三助と上村内藏助の兩人は、敵味方共、別に戦も交へず空しく月日を送るは詮なきことなり、我等兩人、密に虎御前山に潜入して、城に火を掛け、過れ功名せんとて、夜中風雨に乘じて敵城に入り、城内の案内を巡視して居ると、或る役所の前で忍足を聞き咎められたが、三助は氣轉をきかして、「我々は木下奈落の底までも落ち行くものである。義景も、今や斯かる運命の途中を辿りつつあるのではあるまいか？」

藤吉の中間であります、今夜は餘りに風雨激しく、物騒千萬ですから夜討に忍び入る敵兵でもあつては大變と存じ斯くは嚴重に夜廻をして居るのであります」と、當意即妙の返答をしたので、役人も一杯食はされ、「それは御苦勞千萬じや」と、却て敵より賞められた、そこで風上の小屋へ放火すると、城中大に驚き、右往左往、阿鼻叫喚の聲、山鳴り谷響くといふ惨状を呈した、此の時、若し朝倉勢が、機を逸せず、虎御前山へ攻め登らば、落城疑ひ無かつたのであるが、朝倉勢は、ボカーンとした顔をして之を見し、「これは敵の計略じや」などと、香氣千萬なことを言つて居たのは、大失策であつた、隨つて兩人へ對しても、何の恩賞もない、然らば、竹内、上村の兩人は、此の際なぜ「敵城へ放火して参ります」と、上官へことわり、放火の後、恩賞を受ける時の證人をこしらへて置かなかつたかと誰の胸にも、チラと疑問が發せられるが、當時の陣法は、抜かけ功名嚴禁の時代であつたので、元より許可を得られる理由が無い、そこで兩人も、萬一の僥倖を期したに過ぎなかつたから、誰を恨みやうも無い、功名の仕損であつたのは、返すべくも氣の毒であつたと申すの外はない。

所が敵方の陣屋はどうしく延焼して、七百餘も灰燼に歸してしまつた、朝倉勢は、又々敵方に於ては、陣屋を再築するだらうと思ひの外、三河村の田畠へ土居を造り、其の上に高塙を築き連ねた、朝倉勢は又之を望見して、不思議のことと思つて居ると、十六日の白晝、信長は此の高塙の陰を、部下を率ゐ、一步お前へ御免と言はぬ計りに、威武堂々として美濃へ歸陣してしまつた、茲でも又一杯食はされたのである、即ち虎御前山には木下藤吉郎秀吉、磯野丹波守秀昌等が、留守師團長格で、五千餘騎を以て警固して居るので、漸く信長の下山を探知した義景も馬鹿らしくなり、己も大獄、丁野兩城に留守居の兵を置き、十一月三日、一乗谷へ歸陣してしまつた。人間の運命といふものは不可思議のもので、上坂の時は、どん／＼日の出の勢で上つて行くが、一旦下坂の衰運に向ふと、忽ち急轉直下して、奈落の底までも落ち行くものである。義景も、今や斯かる運命の途中を辿りつつあるのではあるまいか？

一三 義景近江に出陣して敗戦の豫感を抱く

元龜四年三月上旬、信長上洛の風聞あり、近江の田子左近兵衛尉氏久より義景に注進して曰く、「信長歸洛の節、若狭より敦賀に出するやも計り難し」と、是に於て義景は、三月十一日、自ら敦賀へ出馬す、天正元年（四月改元）四月中旬、山崎長門守吉象、魚住備後守景因等三千餘騎若狭へ出陣し、栗屋城附近の麥を刈らせ、苗代の水を落させ近村に放火して、佐柿城の北にある在中山に築城して、朝倉勢の番手を置き、五月十日、義景は一乗谷に歸陣した、而して連年の戦争に、將卒疲勞し、民庶困憊す、七月上旬、又氏久より使者を以て、若狭三方の寶仙坊、信長へ内通せりと急報して來たので、再び吉象等三千餘騎を遣はし、七月十日、近江の西北より三方城へ攻寄せた、所へ淺井長政よりも、一乗谷へ飛脚が來て、「信長が横山城表へ出たから合力を依頼す」、注進／＼と、注進が連續するので、義景は朝倉式部大輔景鏡に出馬を命ずると、所勞を口實に謝絶したので、溝江大炊助長逸に令を下した、然るに長逸も亦、「過日江州丁野城番手にあつたから、人馬を静養せなければなりません」と命を受けない、此の長逸は坂井郡溝江郷金津の住人溝江河内守景逸の嫡子である、一向一揆と合戦して功績あり、殊に永祿十年三月、本莊城主堀江景忠を討伐して、本莊城を併せ領した、今、長臣景鏡や長逸が、首を横に振りて肯ぜないといふことは、義景の信用が地に墮ちて行く證據である、そこで義景は止むを得ず、自ら國中の兵を集め、七月十七日一乗谷を進發したが、義景は人心の反覆常なきを思ひ、秋風落木の思ひして元氣なく、母高徳院に暇乞の際も互に流涕數行、喪心したかの感を人に與へた、然しことは義景を評して、「孝行の至なり」と讀め合ふた、世の中には化學萬能などと稱し、化學で立證出來ぬものは迷信なり、愚者なりと速斷する自稱文明人が専くないが、憐む可し、紙一重向ふの障子の先きさへ見透しのつかぬ小化學者達には、茫々たる無限大の宇宙間に自生する、神秘的靈感の絶妙を信することは出來まい、我々

人類には不可解不可説の摩訶不思議なる豫感といふものがある、今度の義景の出陣に對し、景鏡、長逸の反抗、義景自身、母高徳院の惜別、是れ皆、敗戦の前兆、朝倉氏滅亡の期迫れるを豫感せるに非ずして何ぞやである、況や、出陣に際して、並居る女房達まで、一様に打伏してよよと泣き、見送歸城の武士をして、「芽出度き出陣に、不吉の涙を灑ぐとは何事ぞ」と、大聲叱咤せしめたが、斯かる女房連中の頭脳に至るまで、一種不吉の豫感は騒動したのである、斯くて義景は十七日、府中に一宿し、翌十八日敦賀へ着陣、安養寺に滞留す、八月の初め一大事突發す、淺井長政の麾下に屬して居つた、山本山城主阿閉淡路守、燒尾城主淺見但馬守、月ヶ瀬城主等、信長に買取せられし旨、長政より飛報あり、義景大に驚き、六日、近江國柳ヶ瀬へ出陣す、茲に信長勢は大軍、我軍は少數なりといふ非戰論者と、戦捷必ずしも衆寡に據らずといふ開戦論者と、互に口角泡を飛ばしたが、八月六日、遂に開戦に決し、翌日義景は近江國北郡へ進發した、即ち義景は一步々々、自ら死地に陥て行つたのである。

一四 義景、未曾有の敗北

天正元年八月十日、信長、大嶽、丁野兩城を攻陷すとの風聞あり、是に於て義景は柳ヶ瀬より田神山へ移つた、此時の番手は

大嶽城 五六百騎 小林彦六左衛門尉、齋藤刑部少輔、豊原寺の西方院等
丁野城 六七百騎 中島宗左衛門尉、平泉寺の寶光院等

の少數に過ぎない、此の中島宗左衛門尉は、初名を權三郎と稱し、後ち景則と改名した人で、中島周防守景吉の次男足羽郡毘沙門城主である、（福井市中島穂の祖先）十三日夜、白雨樹を動がし、紫電山を撼す、遂に福岡の小屋に落雷するや、信長勢機を逸せず、大嶽城目掛けて突撃す、前波九郎兵衛吉繼登山し、小林、齋藤兩氏を勧誘して、信長

に降参せしめたが、同夜丁野城も、四五千の敵兵に圍まれ、寶光院も亦敵軍の使者の前に、投降を誓ふ、義景は萬事休すと爲し、夜中田神山を下りて柳ヶ瀬に歸陣す、山崎長門守吉象は、「若し討負るとも、君臣諸共に相果つべきを、彼淺井に引づられ、譖代の住國を打捨て、何處とも知らぬ野原に、屍を曝す事は、口惜き次第では御座らぬか」と、長大嘆息をしたが、何も顧みて憮然たるものがあつた、未明、更に疋壠城へ退陣すべく、義景は馬上の人となつたが、部下には最早戦意なく、我もと先を争ふて逃げ出したので、五六里の間は、捨てたる武器や馬具が散乱し、足の踏み入る所もなき慘状を極めた、信長之を追撃して止まず、吉象、その子小次郎、朝倉掃部助等は返り戦ふて討死した、十五日の曉、朝倉三郎景胤、同孫三郎景健、印牧彌六左衛門尉能信も、馬を引き返し、朝倉權頭道景、河合安藝守、詫美越後守、宗徒等と兵を合はし、敵軍二三百騎の中へ魚鱗の陣形を以て突撃し、東西南北と駆け破つたが、敵將木下藤吉郎の五百騎計りの援軍の爲めに逐ひ捲くられ、朝倉治郎大輔景弘、同道景、北庄土佐守景行、朝倉掃部助、同出雲守景盛、三段崎六左衛門、一色治部大輔、詫美越後守等の五十餘騎、皆此處に戦死す、景健、景胤の兩人は漸く虎口を脱し、義景の馬前に縋ることが出来た、義景は未曾有の大敗に切歎し、「馬を引返して奮戦し、軍中に切腹して屍を戰場に捨てん、是れ武士の本懐なり」と言つて聽かぬを、家来共々抑止め、又々木ノ目城まで退陣を勧誘した所が、朝倉兵庫助は、「我等は何共分別がつき申さぬ」と馬に跨り、何處ともなく去つたので、残る隨行の將卒も、悉く退散し、僅に五六騎となつた、斯くて義景は、その夜府中に一宿し、翌十五日、疲馬に鞭打て、晩方一乗谷へ歸城した、「夫れ達人は大觀す、榮枯は夢か幻か」、誰か義景の盛衰興亡の跡を見て、無量の感慨に打たれざる者あらむやである。

一五 義景大野落の隨行者と經由地

天正元年八月十七日、義景は朝倉氏が越前國主として、五代百〇三年間住馴れし、一乗城を引拂ひ、いよ／＼大野落となつた、隨行者左記の如し。

○義 景	○愛 王 丸 義景嗣子	○高 德 院 義景母
朝倉式部大輔景鏡	齋藤兵部少輔	窪田新右衛門
櫻井新左衛門	同 新三郎	中村平五郎
平井三位父子	小川三郎左衛門父子	石來民部丞
築山小五郎	同 六郎左衛門	上田五郎左衛門
藤田忠左衛門	半田宗兵衛父子三人	島津父子
加藤新三郎	今藤源三郎	
鳥居兵庫助景親	九津見溝右衛門	
高橋新助	西山僧真勝	
山内七郎左衛門父子		
足羽郡 經由地		
下宇坂村	田尻 市波 奈良瀬 小和清水	
上宇坂村	品ヶ瀬 朝谷島 境寺	

然らば足羽郡一乗谷村より大野郡大野街へは、如何なる道を辿て行つたかといふと、美濃道即ち昔の羽生街道を通過したのである、現今之地名でいふと、

一乗谷村（出發地） 安波賀

足羽郡
經由地

大野郡 羽生村 樂師 縫原 大宮 野波
經由地～大野町（到着地）

といふ道順になるのである。

一六 義景、赤淵明神に舊恩を深謝す

〔朝倉始末記〕を繕くと、左の一文がある

「斯テ同十七日ノ巳ノ刻ニ御館ヲ出馬有テ、氏神赤淵大明神ヘ御社參、靜ニ啓白シ給テ、數代當社ニ頭ヲ傾ケ、繁榮雖年久、今、家運盡テ牢々ノ體ト成、二度此所ヘ可立還モ不定レバ、今ヲ限ノ參詣トコソ覺候トテ、御涙堰敢サセ給ハズ、抑此御神ハ、元來但馬國ヨリ當所ヘ移奉レリ……今於越前之國モ、此明神ヲ尊崇シ給ケレバ、今一入義景モ、名殘惜敷被思召、金銀寶物共ヲ神前ニ捧給テ、時刻移レバ、其ヨリ御馬ニ被召」云々と叙す、著者は此の義景の「退つ鳥も跡を濁さぬ」態度には、ほとく敬服した、普通の人達は、一旦悲境のどん底に陥ると、どんなに平生豪傑ぶつて居た人間でも、叶はぬまでも神だのみをするか、死にし間の念佛を唱へるか、はては自暴自棄となつて、人を呪ひ、世を詛ひ、神も佛も無きものかなど、氣儘勝手の不平を並べ立てるものが、往々にしてあるが、眞に精神修養を積んだ義景位の英雄になると、「此の世の名残、夜も名残、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づつに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、残る一つが今生の、鐘の響の聞きをさめ、寂滅爲樂と響くなり」といふやうな、哀れ至極の境遇と爲り、屠所の羊の夫れの如く、一步々々、死地へ死地へと足を運んで行く立場に在つても、運命の人力を以て如何ともすること能はざるを自覺して居るから、「天を怨まず、人を尤めず」、我が產土神の社前に額きて、朝倉氏歴代の冥護を深謝し、且金銀寶物までも、寄進することが出来たのである。

一七 洞雲寺と朝倉氏の關係

八月十七日夜戌の刻、義景一行は愈々大野の曹洞宗大龍山洞雲寺に到着した、當時はもと、大野郡羽生庄縫原に創建せられたものである、その故は、開山宣教元勅は薩摩國日置郡市來村萬年山金鐘寺第三世大中奇興の高弟で、師の寂後その四世を繼承したが、享徳三年能登の本山總持寺に轉じ、康元元年越前に來りて、縫原に一字を建立したのが當山である、此の開山の僧那は、斯波氏の被官左近將監であつた、文明年中、當寺第三世青倫の時、越前國主朝倉孫右衛門尉氏景の後見役であつた、氏景の叔父、慈親院玉巖光玖は、敷地を野口に寄進したので此處に移り、更に龜山を経て現地に轉じた、要するに、當寺は朝倉氏所縁の由緒があるので、義景の陣營として充てたものである、而して義景時代の洞雲寺は未だ龜山にあつた、即ち金森五郎八が龜山城を築くに當り、後ち今の地宇西方寺に移轉したのだから、義景は龜山の洞雲寺に宿陣したるものと解釋すれば宜いのである。

一八 平泉寺衆徒の變心と義景の最後

義景一行が洞雲寺に到着したる八月十七日の翌晩、義景は多年愛撫したる平泉寺衆徒の應援を得て、花々しく信長と一戦し、乗るか反るかの運試しをやるべく、早速使を馳せて一書を送つた。

「態々使簡を以て啓達せしめ候、今度江州北表に於て、織田信長と合戦に及び候處に、敗北せしめられしの條、吁夫れ天乎、生涯の鬱憤何事か之に過ぎん、然りと雖、浦公は鴻門の羞を忍びて、而して永く漢家の四百年を開き、賴朝は杉山の難に遁れて、而して遂に扶桑の六十州を占むる者、倭漢古今の通例、豈に之を思はさらむ、仍て今某、陣を當郡に寄せ、殘黨を聚め、再び義兵を發し、而して運を天道に決せんと欲す、是に至りて貴寺若し合

掌の籌を致し、臣功を抽んでらるるに於ては、勸賞は請ひに任せ、而して忠恩長く忘る可からざる者なり、狹
楮の爲に、縷情を回述するは、萬端使舌に附す、請ふ之を察せよ、恐々謹言。

天正元年八月十八日

左衛門督義景（花押）

平泉寺衆徒中

所が、平泉寺衆徒は、數代國主たりし朝倉氏の恩顧を忘却して、信長應援に衆議一決し、義景の使者が未だ洞雲寺へ
歸着せざる前に、先廻して、洞雲寺附近に放火し、信長へ同心の旗揚をした、一方衆徒は一乘城へ押寄せ、城廓、佛
閣、僧房、家臣の諸邸等に放火し、一大紅蓮の舌は山谷を嘔め、火焰天を燒きて、黒煙三日間に亘り、遂に一乘谷中
一物なきまで灰燼に歸してしまつた、前後百〇三年間、春花秋月、歌舞音曲の歡樂鄉は、一朝にして焦土に化した譯
である。

八月十九日、景鏡は、義景の妹婿大野三河守を使者として洞雲寺に遣はし、「御陣所洞雲寺は、我等の陣所亥山城
とは程遠く、甚だ不便なれば、六坊賢松寺へ勤座せられたし」と、誠しとやかに申出でしめたので、西の刻、六坊へ
移轉した、當時の隨行者は左記の通り、

義景小川六郎左衛門、同三郎左衛門父子、加藤新三郎、高橋新介景倍
鳥居兵庫助景親

高徳院
夫_人嗣子_子齋藤兵部少輔、今藤源三郎、九津見清右衛門、西山僧真勝

明くれば二十日の未明、豫ねて謀反の張本人たりし景鏡は、主人義景を弑して、敵將信長より多大の恩賞に預からん
と、忽の間に一族郎黨を非常召集し、「是より義景を六坊に討取て、信長に降参するつもりなり」と意見を發表した

七顛八倒 四十年中 無他無、自 四大本空
と、認めた、斯る危急存亡の秋、尙筆を執りて辭世を書くといふ英雄閑日月の境地は、到底凡人の夢想だも出來ぬ修養
の賜である、嗚呼四十九年の說法、八千餘巻の經典も、煎じつめれば他無く自なく、地水火風の四大もと空である、
况んや人生葛藤の恩讐の如き、今更吾に於て何かあらんやと感じたのである、さすがは吉祥山永平寺の祚棟禪師に就
きて參禪の功を積みたるだけある、斯くて卯の刻、義景は腹十文字に搔切り、高橋新介の介錯で相果てた、そこで景
鏡は義景の首を取りて歸り、稻葉伊豫守長道の一族稻葉土佐をして、之を府中龍門寺在陣の信長に獻じたので、信長
は脚付の臺の上に安置して頸實檢を爲し、諸軍にも一覽せしめたる後、長谷川宗仁に命じ、京都で獄門に懸け、更に
美濃國岐阜で獄門に梶したが、此の頸少しも腐爛せず、八月より十二月に至るまで、顏色生きるが如く、清らかなる
双眼を開いて居られたと稱せられる。

一九 義景の重なる家臣

義景麾下の重なる將兵は左記のものであつた。

朝倉 金吾教景宗滴 細呂木 薩摩守 竹下帶刀 新保彌三郎
弘治元、九、八病死 同 太郎左衛門景墳 黑坂備中守景久 午田源左衛門 元龜元卒
朝倉玄蕃助景連

朝倉 次郎左衛門尉景尙

青蓮華近江守景基

萩原八郎右衛門宗俊

弘治元、七、二十三戦死

孫六郎景冬

魚住出雲守

高屋宗善（博士）

福岡五郎右衛門尉吉澄

同 三河守景重

伊勢周防守

中村五郎右衛門

天正元、八、十四戦死

鞍谷刑部大輔晴政

大炊助長逸

深町圓書頭

天正元、八、十七自害

溝江河内守景逸

堀江中務景忠

福岡石見守三郎左衛門吉清

川尻雲八郎

永祿十三、二、十龍登ニ去ル

野尻下野守

野尻下野守

同 織田信長ニ降ル

堀江左衛門三郎利茂

武曾横之助

新保彌三郎

桑原日向守

堀江左衛門吉延

烏居兵庫助景親

坪河萬七郎

神波新七郎忠成

堀江左衛門吉清

佐伯姫部助

森十郎吉政

前波彌四郎

堀江左衛門吉延

元龜元、六、二十八戦死

朝倉中務大輔景恒

堤民部左衛門實清

堀江左衛門吉清

元龜三、八、十一織田信長ニ下ル

朝倉平右衛門尉吉重

堀江重郎左衛門直隆

堀江左衛門吉清

元龜元、六、二十八戦死

朝倉中務大輔景恒

前波彌四郎

堀江左衛門吉清

元龜元、六、二十八戦死

朝倉中務大輔景恒

神波新七郎忠成

神	天正元、八、十四戰死
九郎	兵衛勝久
天正元、八、十四戰死	山
內	天正元、八、十四戰死
彌五	左衛門
壁田	天正元、八、十四戰死
圖書	七郎兵衛吉房
頭吉澄	天正元、八、十四戰死
清水	三郎左衛門
三郎	天正元、八、十四戰死
左衛門	天正元、八、十四戰死
岩崎	宗左衛門
天正元、八、十四戰死	增井
五郎	天正元、八、十四戰死
左衛門	禾田
天正元、八、十四戰死	宗兵衛宗俊
天正元、八、十四戰死	田尻十郎左衛門秀勝
西島	天正元、八、十四戰死
彦五郎吉尚	天正元、八、十四戰死
久野六郎左衛門	天正元、八、十四戰死
天正元、八、十四戰死	同彦

細呂木治部少輔	朝倉治部大輔景弘	天正元、八、十四職死
伊藤九郎兵衛	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
中村三郎兵衛	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
同新兵衛	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
長崎大乘坊	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
尼壇六郎三郎	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
小泉四郎左衛門	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
神波宮内少輔	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
岡田左馬允	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
内藏助景周	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死
富田九郎右衛門	天正元、八、十四職死	天正元、八、十四職死

半田宗兵衛父子三人	天正元、八、二〇義景二殉死
今藤源三郎	天正元、八、二六愛玉丸二殉死
九津見清右衛門	天正元、八、二六愛玉丸二殉死
西山僧真勝	天正元、八、二六愛玉丸二殉死
篠田新右衛門	天正元、八、二六愛玉丸二殉死
中村平五郎	天正元、八、二六愛玉丸二殉死
上田五郎左衛門	天正元、八、十四戰死
島津父子	織田信長ニ降ル
烏居與七	天正元、八、九死亡
魚住義固	天正元、八、九死亡
佐備後守	天正元、八、九死亡
中村九郎右衛門光友	天正元、八、九死亡